特集 楽しむ

働く人々にとって

童心に戻って遊ぶことが明日への活力に

阿蘇の大空で凧(たこ)上げに熱中する「昔の少年少女たち」

「この年で凧上げなんて、昔だったら〝ヘンなおじさん〟ですがね」と、嬉しそうに話す会社役員の野尻耕喜副会長（四三）。「熊本凧の会（船崎直一会長）」の会員は小学生から九十二歳までの約八十人。最も熱心なのは働き盛りの三十、四十代の人たちです。

熊本名物"赤べこ凧"が空に舞う?!

「子どもを遊ばせようと思って入会したら、自分がヤミツキになってしまった」とデザイナーの須藤通子さん(三八)。

凧作りはまず竹を切るところから始まります。一年間乾燥させた竹を細く割いて骨組みを作り、手すきの和紙に絵を描きます。地上勇策さん（三八）によると「計算して作った凧より名人が目分量で作った凧の方がよく上がるところが凧作りの奥の深いところ」とか。伝統ある凧文化を残そうと、会員たちはボランティアで幼稚園や小学校に凧づくりの指導に出かけています。もちろん有給休暇を利用して…。

同会は、毎年七月に「大阿蘇全国凧上げ大会」を主催する他、世界各国の凧上げ大会へ出かけて国際交流にも一役買っています。「凧を通じて友達ができたのも嬉しい」と郵便局員の内田憲治さん（四三）。黙々と凧を作っては原っぱで友達と飛ばし合う、その姿は少年時代のままです。「世界の空に和凧を上げたい」。自営業の西村健助さん(四四)の瞳に〝夢〟が見えました。

子供たちにとって

未知の世界をどんどん追求していく

テストが終わったら化石調査に行こう！古生物学大好き少女

上益城郡御船町の田代地区。吉無田高原に連なる山からさらに約五百㍍ほど下って行きます。河原へ近づくと川部岬さん（一五）＝町立七滝中三年＝の足取りがぐんと早まりました。これぞと思う石を拾うとハンマーでガッガッと削り、やがて化石がないと分かると次の石を拾う。なかなか根気のいる作業。川部さんがこうして集めた化石はもう三十個になります。

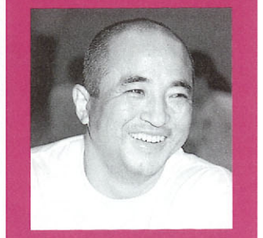
川部さんと化石の出合いは、同町から恐竜の化石が出たと話題になった四年ほど前のこと。母親や妹たちと一緒に御船川に出かけ、一片の木の化石を見つけたことからでした。「やった！」。その時の感動が古生物学への興味をかきたてました。それ以来、図書館の専門書で調べるのが楽しみになりました。

「化石の貝の名前がスラスラ出てくる。これはスゴイと思いましたね」と、古生物学に詳しい松崎校長。

「どんな化石が入ってるんだろう?」

「テストが終わった日など、さあー今日はどこへ行こうかなっと思うんです」と川部さん。お弁当を作って友達を誘い、町内の山や川を丹念に調べて歩きます。「御船町は化石の宝庫。一生の趣味としてずっとやりたい」。今、抱えている研究テーマは、「田代地区における御船層部の下部層の研究」。「将来は生物工学をやりたい」と夢を膨らませています。

障害者にとって



ハンディを超え仲間と共に汗を流す

車イスがコートの中を駆ける「熊本バスケットボールクラブ」

ダッシュ！ストップ！パス！シュート！車いすの両輪がキュキュッと音をきしませて止まったり、方向変換したり、かなりのスピード感です。

夜七時。熊本市長嶺町にある熊本県身体障害者福祉センターの体育館では週二回、「熊本バスケットボールクラブ」の皆さんが練習に汗を流しています。最年長の小橋正人さん（四五）は、バスケット歴二十一年。全国選抜でイギリスへ遠征に出掛けたこともあるベテランです。

車イスバスケットボールはスピーディで迫力満点。

小橋さんは十九歳の時、トラックから落ちて脊椎を損傷、車イス生活になりました。バスケットを始めたのはそれから五年後。「体が不自由になって初めて、スポーツの汗がこんなに気持ちの良いものだと実感できるようになりました」。

車イスのバスケットボールは、プレイするのも観戦するのもスピード感があって面白いスポーツと言われています。一般のバスケットボールとは、ルールが多少異なるだけで、ゴールの高さもコートの広さもすべて同じ。時折、健常者が飛び入り参加で車イスに座りプレイすることもあります。「仲間と一緒に汗を流すのが楽しいんです。健常者の人たちともプレイできたら面白いですね」と小橋さん。ハンディを越えて、スポーツを楽しむ心は同じです。

県民にとって

上質の芸術を普段着感覚で味わう

手軽な料金で楽しめる―県立劇場自主文化事業

熊本市大江にある県立劇場は開館してはや十年。県立劇場は、貸し会場と自主文化事業を行い、県民の文化育成に努めています。

現在、演劇ホールの利用率は九三%。コンサートホールは七七%。しかし、全てが盛況ではありません。「せっかく優れたアーティストが来ているのに、席が空いているのはもったいないですね。」と古谷秀晴企画事業課長。

ハードを提供するだけでなく、ニーズを作ることも大切、と平成二年に始まった〝文化施設ネットワーク事業〟では県立劇場がプロモートすることになりました。海外の質の高いアーティストたちと直接交渉し、県下の市町村で開催しやすい状況を作り出すのです。これまでは都会でしか観賞できなかった演奏や舞台が自分の町で楽しめるようになったのです。

八月一日から十日間、恒例の国際青少年音楽フェスティバルが今年も県立劇場で開かれました。このフェスティバルに参加していたアジアユースオーケストラの熊本での単独公演の入場料は二千円。東京のそれの約三分の一の料金でした。県立劇場のコンサートホールは、日本では屈指の音響設備を整えたホールとして有名です。優れた設備で低料金。文化的な豊かさは案外身近にあるものです。

質の高い室内楽も自分の町で聞けるようになった。